

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20730428

研究課題名（和文） 保育園園児におけるうわさ話の発達研究

研究課題名（英文） Developmental study on gossip between nursery school infants

研究代表者

志澤 康弘 (SHIZAWA YASUHIRO)

平安女学院大学・子ども学部・准教授

研究者番号：60372603

研究成果の概要（和文）：本研究では、保育園園児（4歳前後：42～57ヵ月齢）を対象に、幼児が行うそこにはいない他者についての話題（いわゆるうわさ話）の分析を行い、幼児が他者をどのように理解しているか、また、幼児にとって会話によって情報交換を行うことがどのような意味を持つのかについて検討した。4歳児は心の理論（他者が自分とは異なる信念を持つことを理解すること）の理解が始まった時期であり、4歳に達する前に、うわさ話をするならば驚くべきことである。なぜなら、うわさ話は、聞き手が知っている誰かについて、聞き手が知らない内容を伝えることによって初めて聞き手にとって有益なものとなるからである。これに対して、心の理論を獲得していない段階では、自分が知っていることは他の人も同じように知っているものとして振る舞う。研究の結果、1. 会話に含まれるそこにはいない他者についての話題の割合は4.8%であった。2. 4歳前後の1年間ではこの内容の発話量に月齢変化がみられなかった。3. 明らかな男女差は認められなかった。4. 誰についてのうわさ話をするのかを検討したところ、52ヵ月（4歳と4ヵ月）より後には相手が知っていると推測される者についてのうわさ話を行ったが、それ以前は相手が知らないと推測されるか、誰についてか特定せずにうわさ話を始めていた。これらの結果は、ことばが流暢になってすぐの4歳前後には、少ないながらも第三者についての話題を話すこと、第三者の話題についての発話量は、ことばや認知の発達に伴って増加するのではないこと、4歳になる前は聞き手にとって意味があるかどうかと関係なく第三者についての話題を話すことを示している。このことは、ヒトは第三者についての情報を会話によって交換するという、生まれながらの性質があると予測するDunbar（1996）の仮説を支持する。さらに、本研究の結果は心の理論を持つ時期になって、相手に有用な内容に話題が変化していったことを示しており、心の理論の発達時期について自然観察によって裏づけを与えた貴重なデータである。

研究成果の概要（英文）：The activity of talking about a person who was absent (gossip) between infants (about 4 years (42-57 months) of age) was analyzed to investigate how they perceive others and the meaning of such information exchange. Understanding of the theory of mind (understanding that others have beliefs different from one's own) starts at 4 years old. It is surprising if they gossip before reaching 4 years of age, because gossip is beneficial for the listener only when the listener receives new information on someone he/she knows. Infants before acquiring the theory of mind behave on the assumption that others similarly know what they know. The following findings were observed: 1) Topics about others who were absent accounted for 4.8% of the conversation. 2) No monthly change was noted in the amount of gossip in a one-year period around 4 years of age. 3) There was no apparent gender difference. 4) On the investigation of whom they talked about, infants talked about someone they assumed the listener knows after 52 months (4 years and 4 months) of age,

but, before this age, they talked about someone they assumed the listener didn't know or they did not specify the person. These findings indicate that they start to talk about persons absent at around 4 years of age, when they become able to talk fluently, although the amount of talking is small and does not increase with the development of language or perception, and they talk about the absent person indifferent to whether it has meaning to the listener. These results support the hypothesis proposed by Dunbar (1996): humans have a natural character to exchange information concerning a third party through conversation. The findings were also valuable because it was indicated that the content of such talk became beneficial for the listener when they reached the developmental period acquiring the theory of mind, demonstrating the timing of its development through natural observation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学・生涯発達

キーワード：うわさ話、心の理論、マキャベリの知能仮説

1. 研究開始当初の背景

本研究では幼児期の会話による他者の情報提供（いわゆるうわさ話）を扱う。

会話は生物としてのヒトの重要な特徴の1つである。とりわけうわさ話とかゴシップと呼ばれる会話による第3者の社会的情報の交換は、自然な会話における70%を占めると報告される（Dunbar & Duncan 1997, Emler 1992, 1994）など、ヒトは会話によって第3者の社会的情報を交換することに強い関心を持っている。

ヒトが、会話によって他者の社会的情報を交換するのが重要である理由は、ヒトが大きな社会集団をもつことになったことと関係が深いと考えられている。多数の個体が互いに協力するシステムが継続して存在するためには、協力をせずに利益の分配に預かろうとする者（以下、フリーライダー）を防ぐ必要がある。もしフリーライダーが存在すればその協力システムはきちんと仕事をしている側にとって利益の薄い物となり、個人で仕事をした場合の方が利益が高くなればその

協力システムは崩壊してしまう。ヒト以外の生物ではヒトほど柔軟な社会的協力が成立しないのはこのためであろう。このように、フリーライダーをいかにして防ぐかが協力するシステムを成立させる重要な条件となる（Cosmides 1989）。会話によって提供される他者の社会的情報は、フリーライダーが誰かを知るための最も一般的な手段である。

会話によって提供される他者の社会的情報は社会集団を維持するために、より直接的な意味でも重要であると考えられている。ヒト以外の霊長類はヒトほど大きくはないが社会的集団を持つが、彼らは集団内の他の個体と軋轢が生じた場合や、他個体との結びつきを強めたい時に毛づくろいという身体的サービスを行って、関係を修復したり強めたり維持したりしている。しかしながらヒトの社会集団は大きすぎるため集団内の全ての個体と毛づくろいすると時間がかかりすぎる。このため、相手の興味ある情報を伝達するというサービスを提供でき、同時に複数の個体にサービスを提供できる会話による第3

者の情報提供が発達したのであるという仮説 (Dunbar 1996, 1997) が提示された。

このように、会話による他者の情報提供の重要性は、ヒトの知能は社会的集団が大きくなり、社会集団の中でうまくやっていくために他の動物と比べて高い知能を持つようになったとするマキャベリの知能仮説の文脈の中で議論されている。ところで、幼児の会話による他者の情報提供は別の分野でも有用な情報を与えてくれると期待できる。

ヒトの認知的なレベルでの特徴として心の理論を持つということがある。心の理論とは、ある個体が“他者が自分とは異なる信念を持っている”と仮定して振る舞うことである (Premack & Woodruff 1978)。心の理論は4歳すぎたから獲得されると考えられている (Perner & Wimmer 1985) が、もし4歳以前に会話による他者の情報提供を行うのであればそれは驚くべきことである。なぜなら、会話による他者の情報提供 (いわゆるうわさ話) は、聞き手が知っている誰かについて、聞き手が知らない内容を伝えることによって初めて聞き手にとって有益なものとなる。これに対して、心の理論を獲得していない段階では、自分が知っていることは他の人も同じように知っているものとして振る舞うからである。

2. 研究の目的

もし、Dunbar (1996, 1997) が仮定したように、会話による他者の情報の提供がヒトに特有な性質であるならば、会話が流暢になる4歳前後の幼児でも会話による他者の情報提供を行うと予測される。一方、心の理論によれば、4歳前後は心の理論獲得前後の時期であり、4歳児が会話によって他者の情報提供をしても、彼ら自身は何をしているのか理解していないと考えられ、一見奇妙なことになる。

そこで本研究では、まず4歳前後の児が会話による他者の情報提供を行うかどうかを確かめる。さらに、もし4歳前後の児が会話による他者の情報提供を行うのであれば、彼らは、心の理論獲得前に既に相手が知っている人についての相手が知らない情報という心の理論獲得前には難しいと考えられる情報の伝達を行っているのかそれとも心の理論獲得前に相応の他者の情報提供を行っているのかについて調べる。

3. 研究の方法

観察は大阪市内の保育園で行った。観察対象は事前に文書により観察の同意を保護者から得られた3~5歳児 (27名) であった。観察場面は屋内外の自由遊び場面および昼食、お絵かきなど園児が他児との会話が可能な場面であった。分析に用いた観察の観察時

間は450分であった。

観察方法は個体追跡法 (Martin & Bateson 1990: 1人を一定時間連続して観察する方法) を用いた。1回の観察は10分間とし、4歳以前はPDA (携帯情報端末) に直接データを入力し、会話が流暢になる4歳頃からビデオカメラへの録画に変更した。

記録した項目は、発話が行われた場合、発話の開始時間と終了時間を記録し、発話を行った相手 (自分 (独り言)、他の園児、保育士、観察者、その他、不明) を記録した。同様に、発話の対象も (近くにいない第三者、近くいる第三者、そこにない物事、そこにある物事、自分、相手、その他、不明など) 分類し記録した。以下の記述においては、近くにいない第三者を単に“第三者の話題”として、第三者の話題か否かを扱う。

さらに、聞き手が知っている人として、聞き手の家族、クラスメート、保育士とし、一方、聞き手が知らないと推測される人として話し手の家族、対象を特定しないで始めた第三者の話題とし、第三者の話題の場合、聞き手が知っている人についての話題を行うのかを月齢変化とともに検討した。

4. 研究成果

発話時間全体に占める近くにいない第三者の話題の時間は4.8%であった。すなわち、3歳を過ぎてから5歳までの間 (42~57ヵ月齢) において一定の割合で第三者の話題を話すことが示された。

月齢と第三者の話題の割合とはは相関が無かった (図1, $r = 0.14$, $n = 45$, n.s.)。統計的に有意ではないため、結論はだせないが、月齢が高くなり会話量が増えるにつれて、第三者の話題はむしろ減る傾向にあることを示唆する結果であった。

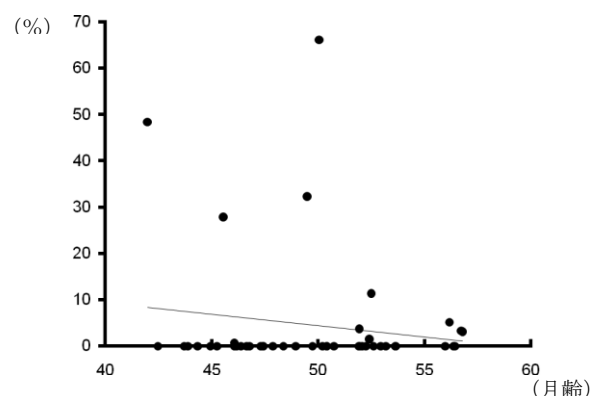


図1 発話時間に占める第三者の話題の時間の月齢変化

性差については、10分間あたりの第三者の話題の回数と時間、全発話に占める第三者の話題の割合とも性差は認められなかった (回数: $T(30) = 0.61$, n.s., 時間: $T(30)$

= 0.90, n. s.、割合： $T(30) = 0.17$, n. s.)。

4歳前後の児において、第3者の話題を行った場合、聞き手が知っている相手についての話題かどうかを検討したところ、52ヵ月齢以前は聞き手が知らないと推測される対象の話題のみであったが、52ヵ月齢を超えると、相手が知っている対象についての話題が含まれるようになり、その割合も増加した(図2)。このことは、心の理論の研究が示すように、4歳以前には相手が知っているか知らないかに関わらず、第3者の話題を行うが、4歳を過ぎると次第に相手が知っている(興味あると推測される)者についての話題に変化することを示しており、心の理論の発達研究のデータと一致する。

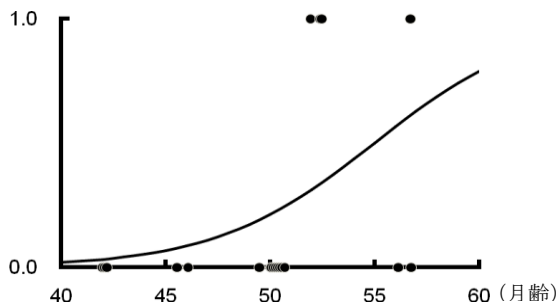


図2 第3者の話題のうち、相手が知っている者の会話であるか(1)、相手が知らないと推測される者の会話であるか(0)。

これらの結果は、会話が流暢になる4歳前後にはすでに第3者の話題(いわゆるうわさ話)を行うこと、第3者の話題についての発話量は、ことばや認知の発達に伴って増加するのではないこと、4歳以前には、相手の興味ありなしに第3者の話題を行うことを示している。すなわち、会話によって第3者の社会的情報を交換するのはヒトに特有の性質であるとするDunbar(1996, 1997)の仮説を支持する結果となった。同時に、4歳を過ぎてから心の理論を獲得するというこれまでの研究を指示する結果が得られた。

ただし、第3者の話題についての月齢変化については研究計画を作成した当初よりも緩やかなものであったため、52ヵ月齢を境に変化するという質的变化は明らかにできなかったが、量的な分析を行うためにも、より詳細で多量のデータ収集が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 志澤康弘、日野林俊彦、南徹弘、3-4歳保育園児の会話に占めるその場にはいない他者についての話題の発達変化、日本発達心理学会第20回大会論文集、査読無し、2008、p. 169。

- ② 志澤康弘、日野林俊彦、南徹弘、3-4歳児のそこにはいない他者についての話題の内容、日本心理学会第73回大会発表論文集、査読無し、2009、p.1098。

[学会発表] (計2件)

- ① 志澤康弘、日野林俊彦、南徹弘、3-4歳保育園児の会話に占めるその場にはいない他者についての話題の発達変化、日本発達心理学会第20回大会、2009年3月24日、於日本女子大 目白キャンパス。
- ② 志澤康弘、日野林俊彦、南徹弘、3-4歳児のそこにはいない他者についての話題の内容、日本心理学会第73回大会、2009年8月26日、於立命館大学衣笠キャンパス。

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志澤 康弘 (SHIZAWA YASUHIRO)

平安女学院大学・子ども学部・准教授

研究者番号：60372603

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：